

〔研究ノート〕

うつ傾向と社会規範認知

— 反社会的行動に対する自他の認知と善悪評定との関係 —

Depression tendency and cognition of social norms : correlations among ratings for antisocial behaviors of self and general others and ethical wrongness

河野 和明

Kazuaki KAWANO

キーワード：うつ傾向，社会規範，自己認知

Key words : depression tendency, social norm, self-perception

要約

うつ傾向者は、自己や環境の認知が否定的であるといわれている。本研究では、社会的規範を取り上げ、自己、他者および一般的な善悪の認知に関するうつ傾向者の特徴を検討した。質問紙により、反社会的行動のリストに対し、(1)自分が当てはまる程度、(2)他者一般が当てはまる程度、(3)道徳的に悪い程度について評定を求め、さらに、(4)CES-Dによって抑うつ傾向を測定した。抑うつ傾向は男性に限り、自己認知および他者認知と弱い正の相関をもっていたが、女性には相関が見られなかった。男女とも抑うつ傾向と悪い程度評定とは無相関であった。この結果は、反社会的行動認知と抑うつ傾向の関係には性による違いが見られること、自他に対する男性うつ傾向者の否定的認知は一般的な規範認知と無関係に生じることを示唆する。

Abstract

It is well-known that depressive persons have negative cognition of themselves and their environment. This study focused on social norms, and attempted to clarify the characteristics of cognition and depression tendency. College students completed a questionnaire which included four parts of questions, (1) ratings of commitment of themselves to slight antisocial behaviors, (2) ratings of commitment of general others to the same antisocial behaviors, (3) ratings of ethical incorrectness for the same people and (4) depression scale (CES-D). In male participants, there were significant correlations between depression tendency, cognition of self commitment and cognition of other's commitment. But, in female participants, those correlations were not significant. In both sexes, depression tendency did not have significant correlation to ethical

incorrectness. These results suggested that there could be sex differences in correlations between depression tendency and cognition of antisocial behaviors, and male's negative cognition for self and others might arise independently of general cognition of norm.

目的

抑うつ者には特有の認知傾向が見られることがしばしば指摘される。特に、自己・世界・未来の認知が否定的であることが、抑うつ認知の三大徴候(Beck, 1976)といわれる。関連して、抑うつ者が否定的なセルフスキーマをもつこと(Derry & Kuiper, 1981)、不適切な自己注目を行うこと(Pyszczynski & Greenberg, 1987)などが指摘されており、このような認知的特徴が抑うつを誘発する要因の一部と考えられている。

一方、セルフ・ディスクレパンシー理論(Higgins, 1987, 1989)によれば、理想自己、現実自己、あるべき自己の間の齟齬が情動的な問題を誘発する要因であり、特にうつは、理想自己と現実自己の齟齬によって起こるとされる。この理論では、自己の目標や規範が否定的情動の一部を規定すると仮定されている。しかし、一般に、自己評価に影響する要因としては、認知された他者や外的規準との比較も重要である(Festinger, 1954)。

では、他者認知や一般的な社会的規範の認知と自己認知はうつ傾向とどのように関係するのだろうか。本研究では社会規範上、「悪いこと」と考えられるが、ある程度実行する可能性のある軽微な反社会的行為をとりあげ、一般的な他者に対する認知（他者一般はどの程度それらの反社会行為をしているか）、自己認知（自分はどの程度それらの反社会行為をしているか）、悪い程度の認知（その行為はどの程度悪いことなのか）がうつ傾向とかかわっているか否かを探索的に検討する。

ここでは、軽微なネガティブ行動の自己認知とうつ傾向にどの程度関連があるか否かを確認する。そして、関連があった場合には、うつ傾向と一般的な他者に対する認知、自己認知、善悪の程度の認知が相互にどのような関係を示すかをみる。その目的は、うつ傾向者のネガティブ認知の生成過程に示唆を得ることである。すなわち、もし、うつ傾向者はネガティブ行動に対する一般的な道徳基準をあまりにも高くもっており、この基準との比較において自己認知が否定的になっているのであれば、うつ傾向と悪い程度認知に正の相関が見られるだろう。一方、もしうつ傾向者が一般的な他者を過剰に善いとみなしており、この一般的な他者との比較において自己認知が否定的になっているのであれば、一般的な他者に対する認知とうつ傾向には負の相関がみられるだろう。一般的な道徳基準が高く、かつ、他者を相対的に善いものと認知している結果、自己認知が下がっているならば、善悪の程度認知と他者一般に対する認知の両者とうつ傾向の間にそれぞれ正および負の相関が見られるだろう。そして、このような比較によるのではなく、自他に対して単に一般的なネガティブな認知を示すのであれば、一般的な他者に対する認知と自己認知は

うつ傾向と同程度の正の相関を示すだろう。

本研究全体の目的は、このような前提に立ってうつ傾向者の社会的比較過程について考察の手がかりを得ることにある。

方法

調査対象者：東海地方の大学生 196 名(男性 76 名、女性 120 名)を対象とした。平均年齢は 19.56 歳(範囲 18～24 歳、SD=1.25)であった。

質問紙：質問紙は、①反社会的行動(33項目)について、自分にどれだけあてはまるかを問う質問(以下、「反社会的行動の自己認知」)、②同じ項目について他者一般(同世代の同性)にどれだけ当てはまるかを問う質問(以下、「反社会的行動の他者認知」)、③同じ項目について「どれだけ悪いことか」を問う質問(以下、「反社会行動の一般善悪評定」)、④抑うつ尺度(CES-D; 島ら, 1985)、などから構成されていた。①②は、「1; まったくあてはまらない～5; 非常にあてはまる」の 5 件法、③は「1; まったく悪くない～5; 非常に悪い」の 5 件法、④は 4 件法(0～3)をそれぞれ用いた。

結果と考察

反社会的行動の評定項目の作成

まず、一般的な反社会的行動の評定リストを策定するために、反社会行動の一般善悪評定をとりあげ、33項目の反社会的行動リストについて男女別に因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。固有値の減衰状況および解釈のしやすさから男女とも 3 因子解が妥当であると思われる。各因子に高い負荷を示した項目内容を検討し、男女はおおむね同一の因子構造であると考えられたため、以降は男女のデータを込みにして分析した。再度、因子分析を行い、固有値 1 以上の基準、固有値の減衰状況から 3 因子解を得た。33項目の因子負荷量を Table 1 に示す。

これら 3 因子は、項目内容から、それぞれ「軽微な反社会的行動」因子、「犯罪・暴力行動」因子、「意地悪」因子と考えられた。本研究では、自己および他者の行動に対する認知を検討する目的からして、ほとんどの大学生がある程度実行する可能性があり、現実味のある行動に評定対象を限定することが妥当と思われる。そこで以降は、「軽微な反社会的行動」因子のみをとりあげ、評定項目を検討した。

項目の絞り込みにあたっては、Table 1 に示した第一因子に .40 以上の負荷を示した項目について、「反社会的行動の自己認知」、「反社会的行動の他者認知」「反社会行動の一般善悪評定」の評定ごとに、因子分析(主因子法)を行い、すべての評定において高い因子負荷量を示す項目を選択した。その結果、10項目(「家でほとんど勉強しない」「よく親に口答えをする」「夜遅くまで外出する」「授業を聞かないで、寝る」「授業をサボる」「学校を遅刻する」「家出をする」「家

でテレビばかり見ている」「成績がとても悪い」「自分の部屋がいつも散らかっている」) が選定された。

これらを尺度項目と見なした場合の α 係数は、反社会的行動の自己認知について .72, 反社会的行動の他者認知について .87, 反社会的行動の一般善悪評定について .91 であり, いずれも一定の一貫性が認められた。そこで, 10項目の合計得点を算出し, 以降の分析に用いた。

Table 1. 反社会的行動に対する一般善悪評定の因子分析結果.

	F1	F2	F3
19. 授業を聞かないで、寝る	.77	.18	.22
28. 成績がとても悪い	.74	-.05	.09
27. 家でテレビばかり見ている	.73	-.08	.09
20. 授業をサボる	.73	.28	.14
29. 自分の部屋がいつも散らかっている	.73	-.10	.09
24. 学校を遅刻する	.70	.13	.15
17. 夜遅くまで外出する	.67	.18	.03
8. 家でほとんど勉強しない	.66	-.10	.24
25. 家出をする	.61	.26	.06
10. よく親に口答えをする	.60	.18	.23
12. 金銭の使い方が荒い	.58	.03	.18
16. 先生に反抗する	.56	.31	.09
3. 仮病をつかう	.55	.21	.44
9. 未成年で酒を飲む	.53	.28	-.08
13. 親にうそをつく	.52	.29	.26
32. お店で、渡されたおつりが多くても、そのままもらう	.50	.18	.15
11. 必要なものをよく忘れる	.46	.07	.26
33. あまり親しくない友人にはノートを貸さない	.42	.14	.16
18. 未成年でたばこを吸う	.41	.54	-.18
23. 親に暴力をふるう	.09	.81	.08
22. 不正乗車をする	.15	.72	.10
14. 人とけんかをして怪我をさせる	.04	.72	.28
15. 弱い立場の人をいじめる	-.04	.72	.27
21. 人のものを盗む	.02	.63	.35
31. シンナーを吸う	.02	.61	.13
30. カッとになって暴れる	.16	.49	.15
26. 補導される	.38	.48	.06
2. 人の悪口を言う	.24	.43	.43
7. 人の気持ちを害することを、意識的に言う	.07	.41	.59
5. 自分がしたことについて責任転嫁しようとする	.29	.26	.62
4. 気に入らない人には、礼儀正しく振舞わない	.27	.27	.60
1. 自分がうまくいかないと他人を恨む	.27	.19	.56
6. 人の不幸を見て、ざまあみろと感じる	.32	.34	.46
説明済分散	7.73	5.05	2.82
寄与率	.23	.15	.09

太字は負荷量絶対値.4以上を示す

10項目の反社会的行動の自己認知得点の平均は 24.98(SD6.54)、他者認知の平均は 29.87(SD7.25)であり、この差は有意であった($t(195)=8.69, p<.001$)。これは、一般的なセルフ・サービングバイアス(例, Kruger, 1999)を反映するものと考えられる。一方、自分認知、他者認知、一般善悪認知のいずれにおいても有意な性差はみられなかった(t 検定による)。

また、他者と比較した場合の、自己の主観的な反社会性を算出する目的で、反社会的行動の他者認知得点と自己認知得点との差(以下、「他者認知と自己認知の差」)を算出して検討の対象とした。

うつ傾向尺度得点

うつ傾向として CES-D の合計得点を算出した。男性の平均得点は 21.71(SD10.17)、女性の平均得点は 22.28(SD10.30)であり、有意差はみられなかった($t_{194}=0.381, n.s.$)。男女込みの平均得点は 22.06(SD10.23)であり、当該尺度の一般的な社会人のうつ病カットオフポイントである 16点からすると調査対象者の過半数(68.4%)がうつと判定される。しかし、同年代を対象とする他の報告(たとえば、小林ら, 2005)も同様の結果を示しており、本研究の対象者が特異であったわけではない。

主要な変数の相関

Table 2 に男女の主要な変数間の相関を示す。

Table 2. 主要な変数の相関係数行列. 各セルの上段は男性, 下段は女性の結果を示す.

	1	2	3	4
1. CES-D				
2. 反社会的行動の自己認知	.30 **			
	.10			
3. 反社会的行動の他者認知	.36 **	.37 **		
	.11	.34 **		
4. 反社会的行動の一般善悪評定	.11	.01	-.04	
	.14	-.03	-.04	
5. 他者認知と自己認知の差	.08	-.52 **	.61 **	-.04
	.02	-.50 **	.65 **	-.01

correlation(r) ** $p<.01$, * $p<.05$

男性において、反社会的行動の自己認知はうつ傾向と弱い有意な正の相関をもっていたが、女性には相関が見られなかった。したがって、男性うつ傾向者は軽微な反社会的行動について自己を否定的に認知している傾向が示された。また、男性のうつ傾向者は、反社会的行動について他者認知とも正の相関を示した。このことから、軽微な反社会的行動について健常範囲の男性う

うつ傾向者は、「自分だけが行っている」と認知しておらず、うつ傾向が高いほど自分と他人の両方がいっそう行っていると認知していることが示唆された。

一方、一般善悪判断は男女ともうつ傾向と相関を示さなかった。このことは、男性において、単に道徳的規範意識が高いことが自他の行為を否定的に認知する原因ではないことを示唆する。また、うつ傾向と「他者認知と自己認知の差」にも相関はみられず、この範囲で、自他の比較がうつ傾向にかかわっている可能性は低いことが示唆された。

重回帰分析（男性のみ）

男性において、反社会的行動の自己認知と他者認知がうつ傾向と正の相関を示したので、男性について、CES-D得点を従属変数とし、反社会的行動の自己認知・他者認知・一般善悪評定を予測変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 3）。

Table 3. CES-D得点を従属変数とし、反社会的行動の自己認知・他者認知・一般善悪評定を予測変数とする重回帰分析の結果（強制投入法：男性のみを対象）。

	β	t	p
反社会的行動の自己認知	.189	1.649	.104
反社会的行動の他者認知	.298	2.588	.012
反社会的行動の一般善悪評定	.117	1.096	.277

モデル全体の重決定係数は.179であり、予測力は有意であった($F(3,72)=5.16, p<.01$)。CES-D得点を有意に予測した変数は、反社会的行動の他者認知のみであった。サンプルサイズが小さく、限定的なデータであるものの、反社会行動においては他者に対するネガティブ認知がうつ傾向と最も関連が強いことが示唆された。

まとめ

以上のように、うつ傾向は、男性に限り、反社会的行動に関して自他の否定的認知と関連を持つが、自他の比較とは関連が低いこと、一般的な規範意識の高さとは関連がないことが示された。これは、うつ傾向者の否定的認知が自他の比較や自分と主観的な規範との比較過程によるのではなく、自他を全般的に「悪いことをしがち」と認知している結果である可能性を示唆する。

一方、女性については、反社会行動に対する認知はうつ傾向と関係を示さず、男性と相関の様子がかかなり異なることが示された。この違いが何に起因するかは明らかではない。ひとつの可能性として、反社会行動において、女性は性役割期待がより強い抑制要因となっているため、性役割に関する認知などが反社会行動認知に及ぼす影響が強くなる結果、うつ傾向との関連がかき消されることがあるだろう。

今後は、調査対象者数を増やして今回の知見を確認すること、反社会的行動以外の認知で性差や自他の比較過程を検討すること、などが課題となる。

引用文献

- Beck, A. T. (1976) *Cognitive therapy and the emotional disorders*. New York : Meridian
- Derry, P.A., & Kuiper, N.A. (1981). Schematic processing and self-reference in clinical depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 286-297.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7(2) 117-140.
- Higgins, E. T. (1987) Self-discrepancy: Theory relating self and affects. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- Higgins, E. T. (1989) Self-discrepancy theory: What patterns of self-beliefs cause people to suffer? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 22. NY : Academic Press.
- 小林幸太・小林玲子・久保清香・園田智子・森満 2005 抑うつ症状とその関連要因についての検討：北海道内の一短期大学における調査から。日本公衆衛生雑誌, 52, 55-65.
- Kruger, J. (1999). Lake Wobegon be gone! The "below-average effect" and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 221-232.
- 島悟・鹿島達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985) 新しい抑うつ性自己評価尺度について。精神医学, 27, 717-723.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. (1987) Self-regulatory perseveration and the depressive self-focusing style: A self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin*, 102, 122-138.